

大学・短大 統一地区 1 / 27

- 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 志望先の試験科目を下記の表により確認のうえ解答してください。
複数志望している場合は、共通する科目を解答してください。

1. 問題・問題冊子表紙等では試験科目名を下記のとおり表記しています。

科目名	表記	科目名	表記
国語総合・現代文B	国語	数学I・数学A	数学
コミュニケーション英語I・II	英語	化学基礎	化学
日本史B	日本史	生物基礎	生物

2. 問題冊子は表紙以下次の順になっています。

科目	ページ	科目	ページ
国語	1～17	数学	43～60
英語	18～28	化学	61～70
日本史	29～41	生物	71～87

3. 志望学科・科・専攻、試験科目

学科・科・専攻		試験科目
大 学	児童学科	国語、英語、日本史、数学、化学*、 生物*から2科目
	初等教育学科	
	栄養学科	
	管理栄養学科	国語、英語、数学、化学*、生物*から2科目
	服飾美術学科	国語、英語、日本史、数学、化学*、 生物*から2科目 ◎英語コミュニケーション学科は英語を必ず選択すること ◎心理カウンセリング学科、教育福祉学科は国語・英語のいずれか1科目を必ず選択すること
	環境教育学科	
	造形表現学科	
	英語コミュニケーション学科	
	心理カウンセリング学科	
	教育福祉学科	国語、数学、化学*、生物*から2科目
看護学科		
リハビリテーション学科		
短 大	子ども支援学科	国語、英語、日本史、数学、化学*、 生物*から2科目
	保育科	
	栄養科	

※化学、生物の両方とも選択して2科目とすることはできません。

4. マークシートについて

- (1) 解答マークシートは2枚あります。科目ごとに異なるマークシートを使用します。
- (2) 解答番号1つに対し1か所マークします。
- (3) 訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないようにしてください。
- (4) 2枚のマークシートの科目名欄にそのマークシートに解答する科目名を記入してください。さらに、右側の同じ科目名の上にあるマーク欄をマークしてください。
- (5) 氏名・受験番号を記入し、HB鉛筆で番号をマークしてください。たとえば、02345番では右上の例1のようになります。

解答は右上の例2のように解答欄にマークしてください。たとえば、解答番号 ⑩ の問題に対して3と解答する場合、解答番号⑩の解答欄の③をマークします。

- (6) 数学の解答欄への記入方法は裏表紙に記載してありますので、この問題冊子を裏返して読んでください。ただし、問題冊子を開いてはいけません。

例1

科目	0	0	0	0	0	0
	国語	英語	数学	日本史	化学	生物

氏名

試験科目名・氏名・受験番号を記入し、科目名と番号をマークする。

受験番号				
万	千	百	十	一
0	2	3	4	5
●	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	●	○	○	○
○	○	●	○	○
○	○	○	●	○
○	○	○	○	●
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○

例2

解答番号	解答欄										
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	—
⑩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

国語

(解答番号は ① ～ ③①)

1 次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】は、いずれも鷲田清一『哲学の使い方』の一節である。これを読んで、後の問い(問1～9)に答えなさい。解答番号は ① ～ ⑮。

【文章Ⅰ】

哲学の「存在理由」がしばしば問題とされる。それも哲学の研究者によつて。哲学の〈外部〉にとっては、哲学の「存在理由」は問題にならない。人びとの経験の奥深くにすでにしかとあるともいえるし、学科としての哲学が存在しなくても生きてゆくうえでなんの不自由もないともいえる。哲学の「存在理由」はつねに「学」としての哲学の可能性を考える哲学研究者が問題としてきたことだ。

さて、これまで哲学といういとなみがなされる場がどこであつたかについて、もうすこし具体的なところから考えてみよう。学問としての哲学は現在、その大半が大学という機関のなかに囲われている。とすると、哲学の「存在理由」が問われるというのは、その大学のなかで哲学が場所を失つたということだろうか。それとも、哲学はそもそも大学のなかの一学科となることで、みずからの場所を棄てたということなのだろうか。いいかえると、大学という場所にあることは、そもそも哲学にとって幸福なことだつたのだろうか。

哲学の〈場所〉、つまり、ひとはどこで思考するのかという、思考の〈場所〉への問いが、おそらくはじめに立てられねばならないとおもわれる。

哲学の〈場所〉への問い。それは、大学という〈知〉の制度のなかで哲学が占める位置への問いであると同時に、というかそれ以上に、〈知〉のトポスのなかで哲学といういとなみが占める位置への問いでもあつた。そのような問いは、したがつて、大学という制度の歴史への問いと、〈知〉(哲学と他の諸学問)の理念をめぐる歴史的反省とに、関係づけられねばならない。たとえば、デカルトでも用いられていた「知恵の木」(とくにその根)や「アルキメデスの点」というメタファー、知識の「建築術的統一」というカントの体系の理念、さらにはそれらと連動してきた《基礎づけ》とか《絶対的な知識》とか《普遍的な妥当性》という哲学の原理的な概念群が、哲学の〈場所〉への問いのなかでさしあたつて問題とされるべきなのだろう。哲学は、知の空間のどこかにみずからを位置づけようとはしないで、むしろもろもろの知がそのなかに配置されている空間(の存在)そのものを問題とするとされてきたからである。そして二十世紀ほど、哲学がその「存在理由」をみずからに厳しく突きつけた時代はこれまでなかつたようにおもわれる。

およそ思考というものは、それが機能不全に陥ったときにみずからの媒体について思考をはじめるのがつねだが、それは哲学が二十世紀に《普遍学》もしくは《基礎学》という輝かしき企てそのものの不可能性という事態に直面したということでもある。これは、^イ谷川雁がかつて詩の終焉^{しゅうえん}について語った言葉を借りていえば、次のような状況に置かれているといえるのではなからうか。

詩がほろんだことを知らぬ人が多い。いま書かれている作品のすべては、詩がほろんだことのおどろきと安心、詩がうまれないことへの失望と居直りを、詩のかたちで表現したもののという袋のなかに入れてしまうことができる。もちろん、そのなかにはある快感をさそうものがないではない。しかし、それはついに詩ではない。詩それ自身ではない。そこには一つの態度の放棄がある。つまり、この世界と教行のことはとが天秤^{てんびん}にかけられてゆらゆらする可能性を前提にするわけにいかなくなっているのである。

(「暖色の悲劇」一九六五年)

哲学の「危機」をこのようにみずからの可能性の根源に立ち返って考える必要はたしかにある。その「危機」の意味が、学問論的にさらに問いつめられねばならないからだ。

しかしひるがえって考えてみるに、《哲学の危機》がまるで《世界の危機》と一体のものであるかのように意識できたのは、哲学者の最後の幸福な錯誤だったのかもしれない。「一、いかなる点で哲学は現在その最終段階にさしかかっているか？ 二、哲学の終わりにあたって、いかなる使命が思惟^{しゆい}のためになお保存されて残っているか？」(ハイデッガー)、このような問いがユネスコ会議への報告書(「哲学の終わりと思惟の使命」一九六四年)のなかにキサイ^Bされ、それが哲学の国際シンポジウムのなかで代読されるような時代は、ひよつとしてまだまだ幸福な時代だったのかもしれない。哲学が、その可能性そのものにケンギ^Cをかけたり——真なるものの規準を提示するという伝統的な課題そのものへの懐疑である——、言語や身体、伝統、生活世界といった、かつて哲学的反省にとって不純な契機として排除されてきた思考外の諸事象をこんどはみずからを可能にしている媒体として改めて吟味しはじめたりしながら自己の存在に批判的にかかわってゆくことこそ、哲学の危機のチヨウコウ^Dでもあるといえないか。胃の存在、あるいは言葉の存在は、それがうまく機能しなくなったときにはじめて意識されるからである。

しかしさらに重要なのは、哲学が《反省》という形式をもつ「わたしの思考」(cogito)の仕事とみなされることによつて、それがだれの前で、だれに対してなされるものかという問いを、じぶんにたいして立てなくなったのではないか、という哲学者の自問であらう。哲学の「存在

理由」を問うにあたっては、まずそのことから考えはじめる必要があるようにおもわれる。

しかし、これはまだ「学問のなかの学問」としての哲学の話である。これに対してはすでに見たようにもう一つ、別の考え方がありうる。それは、哲学というものは、最終的に、たんなるアカデミックに確実な知であることにではなく、「よき生」というものへのきわめて*ブラクティカルな問いへと収斂するものだという考え方である。ここでは哲学は一つの生き方をこそ意味する。哲学とは「哲学的な生」のことにほかならないというこの考え方をきっぱり否定する人たちが哲学研究者たちのあいだにはすくなくならずいるとしても、他方にそれを哲学の最終到達点と考えている人もまたたしかにいた。そしてそのような人たちにとっては、哲学が、ほかならぬ「理論のなかの理論」、「もつとも純粋な理論」のモデルになっていることそのことが、すでに哲学にとって由々しきことなのである。というのも、理論は実践ないしは応用の対項としてあり、実践的なことから、もしくは価値的なことから、つまりはイデオロギーや価値観に関与しないことこそが、理論を純粋にするのだと考えるかぎり、哲学は実践的ではありえなくなるからだ。テオリア（観想）こそが行ないのなかの行ないであるとする、そういう理解とは正反対の理解が近代における理論概念にはつきまとってきた。純粋＝非実践的な理論の典型として哲学が考えられてきたのである。

哲学が「純粋な理論」となることにともなう、実践的問題へのそうした閉鎖は、いうまでもなく、「価値中立性」だとか「没価値性」を標榜する客観主義的な学問理解、ならびに《基礎学》としての哲学の自己理解と切り離しては考えられない。近代的な学問理念を長らく枠どつてきた諸々の概念の二項対立的な構造、とりわけ理論／実践、事実／価値、存在／当為、記述性／規範性、合理性／情緒性、公共性／私秘性といった対立の前項を重ねあわせるところに、近代の、とりわけ実証主義的な学問理念が浮かび上がってくる。すると、それに対応して実践的なことから、いきおいこれらの概念対立の後項をつなぎあわせたところに成り立つことになる。「普遍的な妥当性」が「客観性」に肩代わりされることによつて、実践的に普遍的なことからはその固有の場所を奪われ、主観的・相対的なことからと転落させられる。存在は道徳外的な事実としてその価値的性格を剥がれ、知者はかならずしも賢者でなくなったのである。

そのうえで、わたしたちはもう一度問う必要がある。哲学がそのように失力したのは、哲学的思考が、だれの前で、だれに対してなされるものかという問いを、じぶんに対して立てなくなったからではないのか、と。^オ哲学者は、哲学の外部をこそもつと意識する必要がある。哲学の「存在理由」を問うのなら、それはまっさきに哲学の外にいる人たちによつて問われるべきである。いうまでもなく、この〈外〉は大学の外部、哲学研究者集団の外部という意味ではない。哲学はどこまでも「メタ」という次元を含む。何かへの問いは、その問いそのものへの問

いを自己言及的に含んでいなければならないという意味である。批判は自己批判を内包していなければならないのである。その自己吟味が、哲学においては論理学であり、認識論であり、言語分析であった。そしてその「メタ」というのはどういう場所なのか、それが問題なのである。

(注) *トポス……ギリシャ語で「場所」を意味する言葉。

*「知恵の木」……デカルトが哲学体系を一本の木にたとえたもの。根を形而上学、幹を自然学、枝を医学・機械学・道徳の三つとした。

*「アルキメデスの点」……アルキメデスが地球をてこで動かすための支点を求めたことになぞらえた表現で、思想体系の拠り所、要となる概念のこと。

*プラグマティカルな……実用的な。実際的な。

【文章Ⅱ】

〈外部〉といえば、カントに哲学研究者ならだれもが知っている有名な文章がある。

通常の間人理性はこの羅針盤を手にとって、それが現実に出会うすべての場合に、「……」何が義務にかなない何が義務に反するかを、区別するすべをまことによく心得ており、その際こちらから通常の間人理性に何か新たなことを少しも教える必要はなく、ソクラテスが昔したように、理性をして理性自身の原理に注意させるだけでよいということ。したがってまた人は正直でゼンリヨウであるために、それどころか賢明で有徳であるために、何をなすべきかを知るのに、学問も哲学も全く必要とせぬということ。「……」通常の悟性は、哲学者と全く同様に正しい理解に到達できるという抱負をもつことができるのであり、それどころか、この点では哲学者自身よりも確かだとさえいえるほどなのである。「……」それゆえ、道徳の個々の問題については、通常の間人悟性だけで十分だと考え、哲学をもち出すのはただかたかた道徳の体系をいつそう完備したわかりやすい形で、かつ道徳の規則を実用のために「……」便利な形で、示すためだけに限り、実践的見地で通常の間人悟性をその幸福な素朴さから離れさせ哲学により探究と知識獲得との新たな道に向かわせようなどとすることはやめたほうがよいのではないかと思われる。

(『人倫の形而上学の基礎づけ』、野田又夫訳)

何をなすべきかを知るのに、学問も哲学も必要ないということ、カントのこの考えはまだ別のかたちでも表明されている。たとえば、『純粋理性批判』で「世界概念の哲学」——「世界概念」とは「だれもが関心をもたずにはいられないようなことからに関する概念」のことである

——と「学校概念の哲学」との区別に注意を促している箇所である。ここでカントは、「哲学は（哲学に関する）歴史学的な知識でないかぎり）けっして学びうるものではないのであって、理性に関して言えば、せいぜい哲学すること（Philosophieren）を学ぶことができるにすぎない」と書いている。この Philosophieren に関していえば、まさにこの Philosophieren が大学や学会といった研究機関のなかに制度化されることによって、それじたいとしては非研究者にたいして閉ざされてしまったのではないか、いいかえると哲学がだれに対して語りかけられるのかをみずから問わなくなったのではないか、そのことがここで問われねばならないのである。哲学が思考のテクノロジーや哲学についての歴史的・文献学的な知識になってしまえば、以後、哲学研究者はアドルノのいう「^か哲学の寮監」——哲学の門前で人びとに哲学の学寮に入る資格があるかを厳しく問う監督者——に、あるいは哲学の官僚か技術管理者になってしまわざるをえないのではないだろうか。

（本文中に一部省略・改変したところがある）

問1 二重傍線部 A ～ E に相当する漢字を含むものを、次の各群の ① ～ ⑤ のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は ～ 。

A オク

- ① 壁を強くオウダする。
- ② キョウオウに隠した本心。
- ③ 船でトオウする。
- ④ 食欲がオウセイだ。
- ⑤ キオウの事例にもとづく。

B キサイ

- ① テイサイを整える。
- ② 森林をバツサイする。
- ③ 積み荷がマンサイの車両。
- ④ 返答をサイソクする。
- ⑤ セイサイに記録された資料。

C ケンギ

- ① チユウヤケンコウで作業する。
- ② ケンメイに説得する。
- ③ 土地のケンリを譲渡される。
- ④ ケンアクなムードが漂う。

⑤ 蛇蝎のごとくケンオする。

D チョウコウ ④

① 文学賞のコウホに選ばれる。

② コウザイ相半ばする。

③ オウコウキヅクの生活に憧れる。

④ コウジヨウ的な人手不足。

⑤ 農地をコウサクする。

E ゼンリョウ ⑤

① 古い建物をシユウゼンする。

② マンゼンと一日を過ごす。

③ クウゼンゼツゴの状況に陥る。

④ ドクゼン的な考え方。

⑤ ゼンブクの信頼を寄せる。

問2 傍線部ア「思考の〈場所〉への問い」とあるが、この「問い」の内容として適当なものを、次の①～⑦のうちから二つ選びなさい。解答番号は ⑥ ⑦。

① 哲学の存在理由を担保する〈知〉の制度としての大学への問い

② 〈知〉の空間そのものにおける哲学の位置づけへの問い

③ 万人が学ぶ学問としての哲学の存在意義についての問い

④ 哲学を《普遍学》・《基礎学》に位置づけるという企てへの問い

⑤ 大学という制度において哲学が置かれている〈場所〉への問い

⑥ 大学という機関のなかの一学科についての問い

⑦ 〈知〉のトポスに対する哲学の反省という問い

問3 傍線部イ「谷川雁がかつて詩の終焉について語った言葉を借りていえば」とあるが、谷川の言葉は、どのようなことを示すために引用されたと考えられるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑧。

① 詩が機能不全に陥ったときに詩のかたちで表現した言葉を疑ったように、哲学もみずからの可能性を見失ってきているということ。

② 「世界と教行のことは」とを「天秤にかける」ことで可能性を探った詩のように、哲学の「危機」に対して、哲学の可能性に立ち返って考える必要があるということ。

③ 当時の「詩」は「詩」そのものではないといえるのと同じように、二十世紀の哲学も《普遍学》もしくは《基礎学》という自身の機能が揺らいでいたということ。

④ かつて詩が本来のかたちを放棄したためにぼろんでしまったのと同じように、二十世

紀の哲学も、学問としての機能が揺らぐ状況にあったということ。

- ⑤ 当時の詩が詩としての態度を放棄した状態になっていたように、二十世紀の哲学も自身の媒体を思考の対象とする機能不全に陥っているということ。

問4 傍線部ウ「そのこと」とあるが、この内容の説明として最も適当なものを、次の①～

- ⑥のうちから一つ選びなさい。解答番号は 。

① 哲学が力を失ったのは、哲学が〈反省〉という他者不在の思考を、自己との閉じた関係のなかで行うことに終始し、他者との対話的な知を求めなくなったことが大きいということ。

② 哲学の「存在理由」が問題とされるのは、哲学的思考がだれのために、何のためになされるべきであるかということ、哲学者自身が真剣に考えなくなったことが関係しているということ。

③ 哲学が大学という研究機関のなかで大きな位置を占めたために、哲学がだれに対して語りかけるものであるのかを哲学者が自問しなくなったことが、哲学の危機を物語っているということ。

④ 哲学が〈反省〉という形式を重視しているにもかかわらず、それがうまく機能していないのは、哲学的思考がだれの前で、だれに対してなされるものを明確にしていなかったからであるということ。

⑤ 哲学が「危機」にあるといえるのは、哲学研究者が〈外部〉を気にしすぎて、人間の経験のなかに確実に存在している哲学の「存在理由」を自問しなくなったことによるということ。

問5 傍線部エ「哲学にとって由々しきこと」とあるが、なぜ「由々しきこと」だというのか。

その説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選びなさい。解答番号は

- .

① 意味や価値を問う哲学は「よき生」への実践的なアプローチとなるのに、生き方と切り離せない価値観やイデオロギ―を排斥した単なる理論として扱われているから。

② 本来、哲学ではテオリア（観想）こそが行いのなかの行いとされているが、近代における哲学は、そういう理解とは正反対の机上の学問にすぎなくなっているから。

③ 哲学を「理論のなかの理論」「もつとも純粋な理論」のモデルと考えると、哲学は哲学研究者だけのものになってしまうが、本来は万人に関われるべきものであるから。

④ 哲学は「哲学的な生」のことにはかならないと考える人たちにとって、哲学をきわめてプラクティカルな問いだと考えることは、哲学を^{せし}貶める行為にはかならないから。

⑤ 哲学は一つの生き方をこそ意味するという考え方を否定する人たちは、「理論のなかの

理論」を哲学の最終到達点と考え、理論を純粋化することを重要視しているから。

問6 傍線部オ「哲学者は、哲学の外部をこそもつと意識する必要がある」とあるが、どうい
うことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 。

- ① 哲学研究者ではない外部の人びととともに哲学について考えることで、哲学を難解な
ものにとらえる傾向を変え、哲学の再生を目指すべきだということ。
- ② 哲学以外の学問についても研究することで、他の分野の人びとと連携し、現代に特有
の問題を解決する方法を模索していくべきだということ。
- ③ 哲学についての問いを自分に対して立てることを意識し、論理学、認識論、言語分析
の観点から複合的に自己吟味を怠らないようにする必要があるということ。
- ④ 批判的思考である哲学は、問題を一つ上の視点や外側から眺め、より本質に近づきな
がら自己の立場をも客観的に把握しなければならないということ。
- ⑤ 大学の外部へと出ていき、市井の人びとと広く交流を図ることで、哲学研究者と一般
人との認識の違いを解消していかなければならないということ。

問7 傍線部カ「哲学の寮監」とあるが、これはどのようなことをたどえたものか。最も適当
なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 。

- ① 人が何をなすべきかを知るうえで学問は必要ないのに、知識の獲得を強制すること。
- ② 悟性は人を哲学者と同様に正しい理解に到達させるという事実を認めないこと。
- ③ 哲学の歴史的・文献学的研究に従事したのみで、哲学を学んだ気になること。
- ④ アカデミズムの内部に収まらない広がりをもつ哲学を、研究の場に関じ込めること。
- ⑤ 哲学を究めるには、哲学研究者の視点から知識を深めるべきだと主張すること。

問8 次は【文章Ⅱ】について話し合った授業の様子である。先生の問いかけに対する答えと
して最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 。

先生 カントの文章の引用中に、「理性」や「道徳」が出てきますが、これと「哲学」はど
う関係すると思いますか。【文章Ⅰ】の内容も踏まえて考えてみましょう。

- ① 生徒A：道徳の個々の問題は、「通常の間悟性だけで十分だ」と書いてあるので、道
徳と哲学とでは、拠り所になっているものが違うということだと思います。【文章Ⅰ】を
読んでも、哲学は学問になりえますが、道徳は学問にならないと言えるのではないでし
ょうか。
- ② 生徒B：私は「この点では哲学者自身よりも確かだ」と書いてあるのが気になりました。
哲学はむしろ、道徳とはかけ離れたものなのだと思います。【文章Ⅰ】を読んでも、哲
学は思考の方法を説くもので、道徳は行動の指針となるものという違いがあると言える

のではないのでしょうか。

- ③ 生徒C：「哲学は「道徳の規則を実用のために」示すものと書いてあるので、哲学は道徳よりも理論的なものだと思います。【文章Ⅰ】を読むと、筆者は本来哲学とは生き方につながるものだと考えています。つまり哲学は道徳心を導くためのものなのではないのでしょうか。
- ④ 生徒D：「何をなすべきかを知るのに、学問も哲学も全く必要とせぬ」と書いてあるので、カントは道徳の実践には哲学は不要だと考えているといえます。【文章Ⅰ】にある、哲学が理論としての純粋さを求めることで実践的問題からかけ離れていくことへの問題提起とつながる考え方ですね。
- ⑤ 生徒E：「何が義務にかなない何が義務に反するか」を区別するすべを心得ていると書いてあるので、哲学によってさらに理性を磨くことが、人間社会の秩序を守ることだだと思います。【文章Ⅰ】で、哲学の存在理由を問うていることから、哲学は道徳の土台となるものなのですね。

問9 波線部「大学という場所にあることは、そもそも哲学にとって幸福なことだったのだろうか」とあるが、筆者がこのように言う理由の説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選びなさい。解答番号は ・。

- ① 哲学が大学という機関のなかに取り込まれたことで、真なるものの規準を提示するという哲学の伝統的な課題そのものが機能しなくなったから。
- ② 哲学が大学という場所にあることで、哲学の歴史や文献学的知識を学ぶことが主眼となり、生き方への問いとしてのあり方を失いかけているから。
- ③ 哲学が大学という知の空間に囲い込まれたことで、哲学の存在理由が哲学の研究者から問題とされることがなくなってしまったから。
- ④ 哲学が大学という〈知〉の制度のなかで置かれたことで、哲学の実証主義的な学問理念がその真価を発揮する機会を失ってしまったから。
- ⑤ 哲学が大学の一学科として位置づけられたことで、諸学の根底にある哲学的思考が否定され、学際的研究が行われなくなったから。
- ⑥ 哲学が大学で扱う「学問」になったことで「純粋な理論」の典型として考えられるようになり、哲学的思考の対象を見失った文献学的な知識となったから。

二 次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】は、いずれも平野啓一郎『本心』の一節である。舞台は近未来の日本。ただ一人の家族である母が事故で急逝し、寂しさに耐えられなくなった「僕」(石川朔也)は、母のVF(ヴァーチャル・フィギュア)を製作するため、フィデイクス社の野崎のもとを訪れた。これを読んで、後の問い(問1～7)に答えなさい。解答番号は 19 ～ 31。

【文章Ⅰ】

体験ルームは、意外と平凡な応接室だったが、外部からは遮蔽されていて、壁には闘牛をモチーフにしたピカソのエッチングが飾られていた。かなり古色を帯びていて、しみもある。最近の精巧なレプリカなのか、二十世紀に刷られたものなのかは、わからなかった。

ヘッドセットを装着しても、何の変化もなかった。僕は、これから対面するVFが、AR方式で、現実には追加されるのか、それともヘッドセット越しに見ている部屋が、既に仮想的に再現された応接室なのか、本当に区別できなかった。

黒いレザーのソファの前には、コーヒーが置かれている。座って、それを飲めば、わかることだろうが。……

野崎が、二人を連れだつて戻つて来た。

一人は、薄いピンクの半袖シャツを着た、四十前後の痩身の男性。よく日焼けしているが、僕とは違い、長い休暇中に、ゆつくり丁寧に時間をかけて焼いたらしい肌艶だった。

もう一人は、紺のスーツを着て、眼鏡をかけた白髪交じりの小柄な男性だった。

「初めまして、代表の柏原です。」

日焼けした男の方が、白眼よりも更に白い歯を覗かせて腕を伸ばした。

僕は握手に応じたが、ウインド・サーフィンでもやっているんだらうか、といった眩しい想像を掻き立てられた。

続けて、隣の男性を紹介された。

「弊社でお手伝いいただいている中尾さんです。」

「中尾です。どうぞ、よろしく。暑いですね、今日は。——お手伝いと言つても、ただここでお話をさせていただきただけなのですが。」

彼は、額に皺を寄せて、柔和に破顔した。落ち着いた物腰だったが、こちらの人間性を見ているような、微かな圧力を感じさせる目だった。「お手伝い」というのがよくわからなかったが、僕と同じVFの製作依頼者なのだらうかと考えた。

同様に握手を求められたので、応じかけたが、その刹那に、ハツとして手を引っ込めた。実際には、それも間に合わず、僕は彼に触れ、しかも、その感触はなかったのだった。

「私は、VFなんです。実は四年前に、川で溺れて亡くなっています。娘がこの会社に依頼

して、私を製作してくれたんです。」

僕は、物も言えずに立っていた。「本物そっくり」というのは、CGでも何でも、今は珍しいくないが、中尾と名乗るこのVFは、何か突き抜けていた。それが、僕の認知システムのどこをどう攻略したのかはわからない。誇張なしに、僕には彼が、本当に生きている人間にしか見えなかった。柏原と見比べても、質感にはまったく差異がなかった。

僕は、半ば救いを求めるように野崎を振り返った。彼女は特に、「どうです！」と誇らしげな様子を見せるわけでもなく、「気になることがあれば、何でも質問してみてください。」とやさしく勧めた。恐らく、彼女がVFに接する態度も、これを人間らしく見せている一因だろう。

彼の額に、うっすらと汗が浮いているのに気がついて、僕は驚いた。僕の眼差しを待っていたのか、それは、目の前で、静かにしずくになって垂れ、こめかみの辺りに滲んで消えた。そのベタつくような光沢を、中尾は痒そうに、二、三度、搔いた。

僕は、反射的に目を逸らした。彼の足許には、僕たちと同じ角度で、同じ長さの影まで伸びていた。

「ちゃんと、足は生えてますよ。」と中尾は愉快そうに笑って、「そんな、幽霊を見るみたいな顔をしないで下さい。」と、腹の底で響いているような鈍太い声で言った。

「すみません、……あんまりリアルなので。」

「中尾さんは、実は収入もあるんですよ。」と野崎が言った。

「——収入ですか？」

「これが仕事なんです。」と中尾が自ら引き取った。「ここでこうして、自分自身をサンプルに、新しいお客様にVFの説明をしているんです。それに、データの提供も。お金を受け取るのは、家内と大学生の一人娘ですがね。……かわいそうなことをしましたから、まあ、親として出来るせめてもの孝行ですよ。」

そう説明する彼の目には、憂いの色があった。しかも彼は、「親として出来るせめてもの孝行」と言うだけでなく、その手前で、「まあ」と一呼吸置いてみせたのだった。

僕は、自分の方こそ、出来の悪いVFにでもなったかのように、不明瞭な面持ちで立っていたと思う。「話しかければ、非常に自然に受け答えをしてくれます。ただ、「心」はありません。」という、野崎の最初の説明が脳裡を過った。

彼はつまりAI(人工知能)で、その言葉のすべては、一般的な振る舞いに加えて、彼の生前のデータと、ここでの、何十人だか、何百人だかの新規顧客との会話の学習の成果なのだった。ただ、「尤もらしい」ことを言っているに過ぎず、実際、こうしたやりとりは、大体いつも、似たり寄ったりなのだろう。

第一、それを言うなら、柏原や野崎の言動こそ、僕が誰であろうと、そう大して変わらない、

パターン通りの内容だった。彼らとて、一々、僕の心を読み取り、何かを感じ取りながら話をしているわけではなく、「統語論的に」対応しているだけに違いない。

「お母様を亡くされたと伺っています。きつと、あなたのお母様も、私と同じように、VFとして立派に再生しますよ。娘はね、私と再会した時、本当に涙を流して喜んでくれました。もちろん、私も泣きましたよ。——心から。」

X 僕は、中尾の姿に母を重ねようとした。しかしそれは、どう努力しても止めることのできない、破れやすい、儚い幻影だった。それでも、母とまた、こんな風に会話を交わす日が来るという期待は、僕の胸を苦しみとしか言いようのない熱で満たした。

X わかった上で欺されることを、やはり欺されると言うのだろうか？ もしそれで幸福になれるなら？ 僕は絶対的な幸福など、夢見てはいない。ただ、現状より、相対的に幸福でさえあるなら、残りの人生を、歯を喰い縛ってでも欺されて過ごしかねなかった。

……

その後、ソファに座って、面会の続きをしたが、僕はほとんど上の空で、話の半分程度しか頭に入らなかった。

ヘッドセットを外した途端、VFの中尾は目の前から消えた。しかし、僕の中に残った、人と会ったという余韻は、実のところ、代表の柏原よりも、遥かに彼の方が強かった。

(注) *野崎……「僕」の担当になったファイテイクス社の社員。

【文章Ⅱ】

〈母〉は、授業参観にでも来たかのような佇いで、僕を背後から見つめながら立っていた。ブラウンに染めた髪も、歳を取って丸みを帯びた肩も、普段着にしていた紺のワンピースも、何もかもが同じだった。

「呼びかけてあげてください。」

野崎の声が聞こえた。普段の仕事で、依頼者の指示を受けた時のような錯覚に陥った。

けれども、僕はしばらく、声が出なかった。野崎に見られているという意識もあったが、それだけではなかった。

母への呼びかけ以外には、決して口にしたことのなかった「お母さん」という言葉を、母のニセモノに向けて発しようとする^Dことに対し、僕の体は、ほとんど話難するように抵抗した。それによって、ニセモノになるのは、お前自身だと言わんばかりに。

僕は死後の生を信じないが、もし僕が先に死んで、母が僕ではない誰か——何か——に「朔也」と呼びかけているのを目にしたならば、いたたまらない気持ちになるだろう。

それでも、結局、僕は呼びかけたのだった。恐らくは、やはり野崎から見られていて、〈母〉から、待たれていると自覚したから。

「——お母さん、……」

それは、驚いたように目を睜^{ひら}った。——僕は股^E栗した。固唾^のを呑んで、その顔を打ち目守^{まも}った。

「朔也、今日はお仕事は？」

「……。」

「どうしたの、そんな顔して？」

僕は、何者かに、不意に、背骨を二、三個打ち抜かれたかのようにその場に崩れ落ちてしまった。蹲^{すま}って、僕は泣いた。涙を拭おうとして、ヘッドセットに手がぶつかると、フィデイテクスの応接室の床が直に見えた。

「どうしたの？ 体調が悪いの？ 救急車、呼ぶ？」

僕は首を横に振って、一息吐くと、両手で膝を押しながらゆっくりと立ち上がった。そして、「大丈夫。」と言った。

恐らく、同意すれば、本当に救急車を呼ぶ仕組みにでもなっているのだろう。そうした思考が、僕に落ち着きを取り戻させた。それに、いきなり救急車を呼ぶというのは、母の言いそうにないことだった。

「石川さん、違和感がある時は、『お母さん、そんなこと、言わなかったよ。』と注意してください。『前はこう言ってたよ。』と訂正してあげれば、それで、学習します。そのきつかけの文言も、仮にこちらで設定したものですので、ご自由に変更できます。一度、試してみてください。」

僕は、言われた通りに注意をして、「前は、『大丈夫？』って言ってたよ。」と語りかけた。〈母〉は、少し考えるような表情をして、「そうだったわね。」と微笑した。

そこまでやりとりしたところで、僕は、助けを求めて野崎を探した。

「画面の右上に触れてください。特に何も印はありませんが、そこに腕を伸ばしてもらえば、終了になります。」

言われた通りにすると、視界が閉ざされ、やはり少ししてから最初の画面に戻った。

僕は、会話の途中で切断され、闇の中に取り残されてしまった〈母〉のことを心配した。
Y 「朔也？」と、先ほどとは逆に、〈母〉が僕を捜して呼びかけている。——その姿を思い浮かべると、胸が痛んだ。それは、自然に起こった感情だった。

ヘッドセットを外すと、また母のいない元の応接室に戻っていることのふしぎを感じた。あ

まり夢中になったことはないが、仮想空間には、僕も折々、出入りしている。しかし、他人に見られている場所で〈母〉に会うという状況は、自宅で気晴らしに冒険的な世界に乗り込んでいくのとは、まるで違っていた。

問 I 二重傍線部 A～Eの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は ～ 。

A 破顔した

- ① 晴れやかな顔になった
- ② 顔をほころばせた
- ③ 声を上げて笑った
- ④ 微笑をたたえていた
- ⑤ 穏やかな表情を見せた

B 脳裡を過った

- ① いやな予感につながった
- ② 記憶に焼き付いていた
- ③ ふと思い出された
- ④ ずっと気にかかっていた
- ⑤ 一瞬聞こえた

C 歯を喰い縛って

- ① 限界を迎えて
- ② ひたすらに力を込めて
- ③ できるだけ努力して
- ④ 必死に耐えて
- ⑤ 無力さに抗^{もが}って

D 詰難する

- ① 思い悩む
- ② 咎^{とが}める
- ③ 歯向かう
- ④ 逃げる
- ⑤ 焚^たきつける

E 股慄した

- ① 恐ろしさで足が震えた

- ② 惚^{ぼろ}けて突っ立っていた
- ③ 思わず身震いをした
- ④ 怖^{おそ}し気づいて弱腰になった
- ⑤ 緊張で体がこわばった

問2 傍線部ア「ハツとして手を引っ込めた」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21。

- ① 中尾に握手を求められたため、何気なく応えようとしたが、中尾がVFであることを思い出してあわてたから。
- ② 「お手伝い」とはということがわからなかったが、握手をしようとしたことで、その意味がわかったから。
- ③ 何の疑いもなく中尾の手を握ろうとしたその時に、その手が、本当は中尾のものではないという事実を知ったから。
- ④ 自分の手が中尾の手に触れる寸前に、中尾はVFなのではないかという不信感が、一瞬頭をかすめたから。
- ⑤ 中尾が差し出した手に触れようとしたその瞬間に、感覚的に中尾が生身の人間ではなくVFであると察知したから。

問3 傍線部イ「僕は、反射的に目を逸らした」とあるが、「目を逸らした」理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

- ① 中尾と会話をしていると、あまりにリアルすぎてどうしてもVFと信じられず、生きている人間でなければ幽霊に違いない気がして、自分の目で足もとの影を確かめずにはいられなかったから。
- ② 中尾がどこからどう見ても生きている人間としか見えずに衝撃を受けているところへ、さらに汗という生命を物語る現象を目にして、自身の理解の範疇^{はんちゆう}を超える存在を直視していられなかったから。
- ③ VFを人間らしく見せるために、見た目や表情だけでなく、汗まで作りこむという演出をやり過ぎだと感じ、ファイテクス社のやり方に不満を覚えたことを、野崎らに表情から悟られなくなかったから。
- ④ 生身の人間の仕種^{しぐさ}であれば何ということもないが、汗のあとを痒そうに搔くという自然な動作がかえってVFの不自然さを強調しているようで、VFはしよせん偽物だと思いが知らされたから。
- ⑤ 目の前にいる中尾が、自分と同じように親を亡くした娘さんが製作を依頼したVFだと聞き、自分の母もこんなにまでリアルに蘇^{よみがえ}るのかと思うと、驚くと同時に畏怖の念

が込み上げてきたから。

問4 傍線部ウ「僕は、自分の方こそ、出来の悪いVFにでもなったかのように」とあるが、この時の「僕」の心情として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 。

- ① 親である中尾が、娘に対して「孝行」という言葉を使うことの違和感と、自然な口調でそれを語る様子とのギャップから、彼の発言はAIが組み立てた言葉であるということをやっと理解し、その事実にはショックを受けている。
- ② 母親のVFの製作を検討している顧客に「せめてもの孝行」という言葉を聞かせることで購入を促そうとする中尾の抜け目のなさを感じ取り、このやりとりはあくまでも企業によって操作されたものなのだと初めて思い知らされている。
- ③ 憂いを帯びた表情と完璧な話しぶりで親としての心情を語る中尾のVFも、「孝行」という言葉の使い方を間違えるのだということを目の当たりにしたことで、VFには「心がないのだということ」を今更実感し悲嘆している。
- ④ 中尾が用いた娘と自分の立場の逆転を踏まえたかのような「孝行」という言葉や、心情を表出したかのような表情の変化や物言いが、「心がない」と聞いていたVFによって自然になされていることを受け止めきれず、動揺している。
- ⑤ 中尾は、AIが学習したことを尤もらしく言っているだけなのだと知りつつも、「孝行」という言葉を自嘲気味に使う様子に人間らしさを感じさせられたことで、亡き母との会話が叶うことへの期待で頭がいつぱいになっている。

問5 傍線部エ「相対的に幸福」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 。

- ① 母が活着ているところと同じ毎日を送れること。
- ② 現実より仮想現実の中に本当の幸せを求めること。
- ③ 母の死を巡る後悔から解放されて暮らせること。
- ④ 母のいない寂しさがほんの少しでも紛れること。
- ⑤ 亡き母がVFとして立派に再生すること。

問6 傍線部オ「僕はしばらく、声が出なかった」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 。

- ① 生前の姿そのままの母が目の前に現れたため、なつかしさといとおしさで胸がいつぱいになってしまったから。
- ② 野崎から「呼びかけてあげてください。」と声をかけられたが、何について呼びかけたらいいかわからなかったから。

- ③ ようやく念願の母との対面の日を迎えた「僕」が喜ぶことを、野崎が期待して待つてい
ると感じたから。
- ④ 母その人ではなく母の虚像にすぎないものを「お母さん」と呼ばなければならないこと
に、幻滅したから。
- ⑤ VFに対して「お母さん」と呼びかけることは、本物の母に対する冒瀆びやくのような気がし
て、ためらわれたから。

問7 「僕」の母親について、【文章Ⅰ】のX では「母」と表記されているのに対して、
【文章Ⅱ】のY では「<母>」と表記されている。これについて六人の生徒が話し合
った。次の(1)～(6)の発言について、内容が適当なものには①を、適当でないものには
②を選びなさい。解答番号は ②⑥ ③①。

- (1) 生徒A：「Xは、まだ母親のVFが存在しない段階だから、亡くなった本物の母という
意味で「母」と表記し、「<母>」はその母親のVFだから、「<母>」と表記している。「僕」
の中では人間がVFかという点で別の存在なんだ。 ②⑥
- (2) 生徒B：「母」は「僕」の記憶の中の母親だよ。一方でVFの「<母>」はAIが生前
の母親のデータを学習して生まれたものだ。「僕」は、外見は同じでも「母」と「<母>」
の中身は違ふととらえているようだ。 ②⑦
- (3) 生徒C：VFの「<母>」は、「救急車、呼ぶ？」と言ひなど、生前の「母」とは違ふ点
があるけれど、学習によってこれを修正するともある。これから「母」になる過程の未
完成の存在という意味でも、「<母>」と示されているんだ。 ②⑧
- (4) 生徒D：「僕」は「<母>」が僕を捜して「いる姿を想像して胸を痛めている。心情とし
ては、VFの「<母>」と生前の「母」を重ね合わせてとらえているね。「<母>」も、「僕」
の中の愛着を呼び起こすという点では、「母」と同じだといえるね。 ②⑨
- (5) 生徒E：「僕」は目の前に現れたVFの「<母>」の存在を受け入れられないでいるね。
さらに、闇の中に取り残されてしまった「<母>」を心配している。この「僕」の後悔が、
「<母>」という表記に込められているんだよ。 ③⑩
- (6) 生徒F：「<母>」は「母」とは異なるVFとしての存在だけれど、一方で同じ見た目
があるがゆえに、「ニセモノ」と割り切れない気持ちがある。「<母>」という表記が用いら
れる背景には、「僕」のこの戸惑いもあると言えるね。 ③①